

四国教区中高生青年キャンプメッセージ（3回目）

説教題→特につけませんでした。

日時 2014年8月13日

聖書箇所 ヨハネによる福音書第17章6～19節（口語訳）

5 説教者 安井聖

ヨハネによる福音書第17章を朗読します。この第17章は、主イエスが十字架におかかりになる直前に、弟子たちひとりひとりにご自分の思いを語りかけ、そしてこの第17章ではその弟子たちのために主イエスがお祈りをなされた、その祈りの言葉が書かれています。

10

——聖書朗読——

昨日、トランスフォーマーという映画を見に行った話をしましたが、本編の上映前に次々と予告編が出てきました。その中に大変シリアスなあのドラえもんの予告編がありました。今回のドラえもんはなにか違うんじゃないかと思わせるようなバックミュージックで、期待させるわけです。わたしは行く気はないんですが……。ドラえもんにジャイアンというガキ大将が登場します。彼の口癖をご存知でしょうか。「お前のものは俺のもの、俺のもの俺のもの」。何とむちゃくちゃな言葉だと思います。「お前のものは俺のもの、俺のもの俺のもの」。このジャイアンの考え方にしがって、のび太くんは自分のおもちゃを取りあげられ、泣き寝入りをする。こういう経験をしたことである人ならば、なんてジャイアンはひどいやつだろう、と思うでしょう。「お前のものは俺のもの、俺のもの俺のもの」。そんなはずはない。「お前のものはお前のもかもしれないけど、ボクのはボクのものだ」。そこんとこ、ちゃんとしてもらわないと……。

聖書の中には十戒があり、十戒にはちゃんと、人のものを欲しがってはいけない、とある。聖書からしても、ジャイアンの言い方は許されません。ところが、今日一緒に聴いたイエスさまのお祈りの中で、びっくりするようなことをイエスさまはおっしゃっているのです。今一緒に聴いた9節の最後のところ、「彼らはあなたのものであります」。先ほど、これは弟子たちのためにイエスさまが神さまに祈られた言葉だと言いました。「彼ら」というのは、イエスさまの弟子たちのことです。もちろんこの祈りは弟子たちのためだけではなくて、イエスさまを信じ、イエスさまに従って生きているわたしたちのための言葉とも言えるんです。イエスさまはわたしたちを見まわしながら、神さまに祈っておられるんです。「神さま、彼らはあなたのものであります」。

これ、ジャイアンよりもすごい言葉ですよ。ジャイアンは、別に「のび太が俺のものだ」とは言っていないんです。のび太が持っているものは俺のものだと言ったのです。でもイエスさまは、わたしたちの持っているものが神さまのものでおっしゃっているのではなくて、わたしたち自身が神さまのもの、「あなたのものであります、神さま」と言われる。ジャイアンよりもすごい言葉です。

イエスさまは、ジャイアンよりもすごいガキ大将なんでしょうか。ジャイアンよりも意地悪なことを考えて、こんなお祈りをなされたのでしょうか。もちろん、ここにいるだれもが、そんなはずはないと思ったに違いない。でも、そんなはずはないんだったら、このお祈りは何なのでしょう？「神さま、ここにいる人たちはみんなあなたのものであります」。きっと深いわけがあるに違いないと思います。

今、ご一緒に聞いたイエスさまのお祈りの最後に、17 節、あるいは 19 節に繰り返されているひとつ
40 の言葉があります。それは「聖別する」という言葉です。「聖別する」なんて言葉、聞いたことがない、
と何人もの方が思っているかもしれません。聖別するとは、これは神さまのために用いるきよいもの、
聖なるもの、として選び出すことです。わたしがこの四国のキャンプに参加していた若い頃、鴨川の上
45 流の方でよく泳いでいました。河原には石ころが沢山あります。あんまり人がいるところでやるとあぶ
ないのですが、よく川でやったのは石投げです。ヒュッと投げて、水面をトントントントンと石が跳ね
ていく。昔だったらわたしは 12~13 回跳ねさせることができました。もちろんどんな石でもはねてくれ
るわけではない。平べったい石を探す。いろいろ探して、これならいいと思う、役に立つ特別な石を探
す。それと同じように、神さまはわたしたちを聖別しておられる。お前は特別な者だと選んで、ご自分
のものとしてくださる。あなたでなくてはいけないんだと、そう神さまは思って、わたしたちを選んで
50 ご自分のものとなさり、そして神さまの御用のために役立てようとしてくださる。それが「この人たちは
あなたのものです」とイエスさまがお祈りなさった意味です。

だとすると、いやな気持ちしないんじゃないでしょうか。ああ、そうか、ぼくは神さまのものなんだ、
わたしは神さまのものなんだ、神さまがそんなに素晴らしい、大切なものとしていてくださる。これは、
とても誇り高いことですね。誇りに思うということ、わかりましたか。特別に選ばればなんかうれし
くなるでしょ。おまえじゃなきゃいけないからこれをやってくれよ、と例えば先生にそんなふう頼ま
55 れる。最初はめんどくさいなあと思うかもしれませんが、やっぱり思い直すと、先生がそんなふう
に自分のことを選んでくれたのかって、誇りに思う。でも、先生じゃない。神さまがそうやってわた
したちを聖別なさって、ご自分のものとなさっておられる。ここにいるみんなに神さまが、お前はわた
しのものだよと語りかけてくださる。

わたしは以前、キリスト者のゴスペルシンガーで、アコースティックギターをかき鳴らして歌う女性の
60 歌手の歌を聴き、そのお話しを聴きました。Migiwa さんという方です。まあ、お名前が「みぎわ」で
すから、詩篇 23 篇に「いこいのみぎわに伴われる」という言葉がありますから、ピンと来る人は、「あっ、
クリスチャンホーム育ちだな」と思う。この Migiwa さんはご両親がキリスト者で、小さい時から教会
に行っていたらしゃったそうです。ところが中学生のころ、学校に行けなくなってしまいました。ふと
70 したきっかけだそうです。誰にも会えなくなった。部屋に閉じこもってしまう生活を何年も続けたそう
です。人が自分を見る目が怖かった。わたしたちもそういう気持ちを、ときに経験しますよね。いじめ
られるという経験をした人であれば、そういういじめの何がつらいかと言えば、厳しい目で自分を周り
の人が見ているという、そういう周りの目が耐えられない。自分をばかにしている。自分なんかここに
いない方がいいと思って見ている。そういう目にさらされるとだんだん自分もつらくなる。自分なんて
価値のない、自分なんて意味のない人間じゃないか。でも、そんな気持ちを真正面から受け止めるなん
75 てわたしたちにはできませんし、Migiwa さんにもできなかつた。だから、家にひきこもったんです。誰
にも会わないようにして、そういう思いをなるべく遠ざけて……。

ところが不思議なことに、この Migiwa さんは一つだけ外に出ていける場所があった。それが教会だ
ったそうです。教会ではそんなふうに見られない、という思いがあったんだと思うのです。でも、それ
でも何年も学校にも行けず、部屋に閉じこもる日々を重ねながら、あるとき教会でこういう言葉を聴い
75 た。イザヤ書第 43 章 4 節の言葉です。「あなたは私の目には高価で尊い、私はあなたを愛している」。神
さまが自分にそう語りかけてくださっている。わたしのことを高価だ。大変貴重な宝物だと言っておら

れる。その言葉が本当に心に響いたそうです。そして、だんだんとそこから立ち上がって、外に出て行くようになった。自分自身を生きる誇りを失っていたんです。自分自身がこの自分のままでいいんだと誇りと喜びを持って生きることがわかんなくなっていた。でも聖書を通じて神さまは、そうじゃない、

80 お前はわたしの宝なんだ、お前じゃなきゃいけないんだ、と語りかけてくださった。Migiwa さんもまた、神さまに自分を聖別していただいているんだということがよくわかった。そして、引きこもっている間にやることがなかったから、一生懸命ギターを弾いていたそうなんです。その経験が生きた。部屋を出て、自分にできることはギターを弾いて歌うことだと思って、今、活動している。

今晚、わたしたちにも神さまは同じように語りかけてくださっています。あなたは、わたしのものだ。

85 あなたはわたしの宝だ。あなたでなければならないと思って、わたしはあなたを選んだんだ。そして、わたしのために生きていくことを心より願っているよ。

でもわたしたちがその神さまの語りかけを、そう簡単に信じられないという思いを持ってしまうのも、事実だと思います。なぜか。そのようにいくら言われても、やっぱり自分を見ちゃうんです。先ほど周りの目が気になると言いました。でも果たして本当に厳しい眼差しを自分に向けているのは、周りの人たちでしょうか。自分自身がそうしているのではないのでしょうか？自分が一番自分に厳しいのではないのでしょうか。一番自分が自分のことを嫌ってるんじゃないのでしょうか？一番自分で自分を裁いているんじゃないのでしょうか。そうしたくなるのは、自分の弱さや、自分のだらしなさや、自分の罪深い姿を、自分が一番よく知っているからです。でも、イエス・キリストはここで祈りを捧げられた。19 節、「また、彼らが真理によって聖別されるように、彼らのためにわたし自身を聖別いたします」。この「わたし自身を聖別いたします」というのは、別の翻訳を読みますと、「わたし自身を捧げます」という訳になっています。イエスさまがご自分を捧げてくださったと聞けば、ああ、これはイエスさまが、ご自分の命を捧げて、十字架に死なれることを言っているのだとわかる。わたしたちが神さまにきよめていただいたのは、お前はきよいものだ、わたしのものなのだ、と神さまがわたしたちを受け入れてくださったのは、イエスさまがわたしたちの罪を全て背負って十字架に死なれ、ご自分の身を捧げてくださったから

90

95

100

です。

そういう意味では、自分にこういういいところがある、こういうことができる、こういう能力がある、だから高価で尊いんですよ、ということじゃない。むしろ、自分に向かって厳しい眼差しで見つめながら、わたしにはこれもできない、あれもできない、こんなわたしではダメですよ、と思う。わたしを選んでくださる？わたしをお用いになる？わたしの何を用いてくださると、神さま、あなたはおっしゃるのですか。わたしには何もありません。ダメなところだらけです。しかし、神さまはそんなことを百も承知で、「だあ～かあ～らお前のために、御子イエスは自分の命を捧げて、お前をきよめたのだ。お前は罪人じゃない。お前はきよいものなのだ」。

105

もう一つ心に留めたいのが 17 節です。「真理によって彼らを聖別してください。あなたの言葉は真理であります」。聖別してください、そうイエスさまは神さまに願っています。わたしたちがきよいものではないから、きよめてください、と祈っておられるのではありません。わたしたちが自分のきよさを、自分の素晴らしさを、神さまの目に宝とされている、そういう本当の自分の姿を、何度も見失ってしまうから、イエスさまは祈って、願っておられるのです。彼らが、本当の自分のきよさに気づくように、日々彼らを聖別し、わたしの十字架の恵みを彼らに注ぎ、彼らがいつも本当にその恵みに立って、きよくされていることを信じて、立ちあがって、生きていくことができるように、神さま助けてください。

110

115 このイエスさまの必死の祈りがあるから、わたしたちは独りではありません。わたしたちは自分自身の人生を独りで生きているのではないのです。この祈っておられるイエスさまが、いつも共におられるのです。わたしたちがどんなに不信仰に陥っても、このイエスさまが祈っておられるという支えがあれば、わたしたちは立ち上げられる。

皆さんはスモン病という病気をご存知でしょうか？このスモン病というのは、以前、大変多くの人を苦しめた薬害による病気です。薬害というのは、病気になって薬を投与されて、薬に悪いものが含まれていて、それによって体が侵されてしまうというものです。つまりその薬を使っていた時には、そういう副作用があるとお医者さんも気づいていなかった。そのために誤って投与が続けられた。そのようにしてスモン病になった人たちがいました。この病気はだんだんと体の機能が衰えていき、体が動かなくなっていく病気です。そういう病を負った一人の高齢の女性の方が、その病気がきっかけになって教会に行き、洗礼をお受けになった、ということ、ある牧師が話してくださいました。その方は重い病気でしたので、信仰に導かれはしたけれども、教会に行けず礼拝に出席したことはありませんでした。ですから、牧師さんがその人の家を訪問して、聖書の話をした。そしてご自宅で洗礼を受けた。でもその人は、自分は教会には行っていないけれども、自分は教会に繋がっているんだということが、とても嬉しかったし、励みだった。だから、家において教会のために自分にできることは何かないだろうかと
125 思って、得意の手仕事、編み物をして、いくつもの編み物のセーターなどをつくって、教会のバザーに献品なさったそうです。そうやって自分が、神さまの役に立っていることを、教会の交わりの中に生かされているということ、喜んで生きていた。ところが、病気は大変残酷です。その方の体が、だんだんその編み物の手仕事すらできないほど、その人の体を侵し始めた。そんなある日、その牧師さんがその女性を訪ねた時に、この方は牧師さんに、本当に自分のつらさ、悲しさを訴えたそうです。「わたしはもう何もできなくなりました。わたしはもう生きていてもしょうがない。先生、わたしは神さまに自分が死ぬようにと願っていいですか」。そこまで追い詰められていた。ところがその牧師さんはきっぱり答えたのです。「いいえ、そんな祈りを神さまはお許しにならない。あなた、何もできないと今おっしゃいましたね。そんなことはないでしょう。あなたはお祈りができるでしょう。だったら、わたしの祈りを助けてください」。ここにも牧師の方が何人もいらっしゃいます。牧師の大切な働きは、教会に来るいろいろな人たちの、誰にも話せない、打ち明けられない秘密を聴いて、その人たちの苦しみのために独りで祈ることです。この牧師さんはその女性を信頼して、「これは自分が沢山抱えている祈りの課題の三つだけ、この三つをあなたに委ねる。この祈りをわたしに代わってあなたが祈ってください」と言って、三人の人ひとりひとりが置かれている状況や、悩み、苦しみを説明して、祈ってもらうことにした。そして祈ってもらったその人の問題が解決したら、そのことを伝えてあげて、じゃあ今度はこの人のために祈ってくださいさい、新しい人を紹介する。そのようにしてこの女性に、祈りの奉仕をすることを求めた。この人は、そのようにして牧師の祈りを助けるようなとりなしの祈りを始めて、もう嘆かなくなった。自分自身を生きる誇りも喜びも見失ってしまうような戦いの中で、教会の交わりの中で生かされている喜びを見出した。祈りの奉仕をしながら、「ああ、自分はこうやって、神さまのお役に立っている、神さまのものとして生かされている」、そう気づかされた。

150 先ほど、この人の病気は薬害による、と言いました。たとえば、薬害エイズ事件というのが何年前前にありました。そうすると、皆さんも分かると思うのですけれども、ああいう薬害というのは裁判になるのです。いくらお医者さんが知らなかったとは言え、その結果体に重い障がいを負ったり、痛みを負

ったりということになれば、やはりきちんとお医者さんがその薬の何たるかを知って処方すべきじゃないか、と批判されても仕方ない。で、実際、スモン病もその訴訟が起こったそうです。スモン病の裁判の御世話役をしていた人が、この女性のもとを訪ねてきたそうです。そして、「あなたもぜひ原告団に加わってください、訴えて彼らの不正を正して、きちっと賠償してもらおうではないですか」と言った。ところが、この女性は、何度も説得受けつつも、最後まで原告団に加わることを断ったそうです。こうおっしゃった。「あのお医者さんは、わたしの病気を治したいと思って、わたしにあの薬を投与してくれた。確かに、ちゃんとその薬のことがわかっていたらという気持ちがないわけじゃない。でも、あの人にわたしの人生に害を及ぼすという気持ちはなかった。わたしのためにと思ってあの薬を使った。わたしはそう思うから、あの人を赦します」。わたしは本当に胸打たれながらこの話を聴いた。重い病を得た痛み、つらさ以上に、その病気を通して自分はこうやって神さまのために生きるものとされているということに目が開かれた、その喜びがこの人を生かしていたのだ、と思いました。その牧師さん言われた。この方の晩年、自分がその人を励ましたい、支えになればと思って訪問を続けていたけれども、ことは逆だった。自分がこの方とお会いすることによって力づけられた。自分がこの人によって何度も励まされた。

この人だけの話ではありません。わたしたちがそのように神に聖別されて、神のものとされている。そして、わたしたちが神のものとして生かされていることを一番よくわかる場所は教会です。教会に来て、どんなにささやかな奉仕でも、その奉仕をさせていただきながら、わたしはこうやって神のために生きる者とされていると思う。そのことをちゃんと受け止めて生きていけば、わたしたちは自分自身の人生を、自分の命を生きる喜びを見失うことはないのです。

もちろん、いつも教会の奉仕をしている時に喜びがいっぱいだ、というわけにはいかないとも思います。わたしは東京の新宿にある教会で牧師をしています。神学校を卒業して、すぐに今の教会に派遣されました。最初は、米田奈津子先生という高齢の女性の牧師さんのもとで、副牧師としてわたしは働いていました。わたしはその米田先生のもとでの副牧師の生活を、大変に感謝しています。あまり口うるさい人ではなかったですし、背中でものを語るというタイプの男らしい女性でしたので、まあ、わたしがやってるのを見て、牧師の働きを身につけてらっしゃい、というような感じで接していただきました。だから、わたしが最初の 5 年間主にやっていたのは、米田先生が高齢であったので、先生の足となり、車でいろいろなところを走った。ところがその米田先生は、わたしが副牧師になって 6 年目にガンで亡くなりました。亡くなったあと、そのままわたしはその教会の主任牧師となった。主任牧師になったとたん、わたしは面をくらったというか、びっくりした。それまで米田先生が教会の人たちの悩みごとを聴き、いろんな相談にのっておられた。ところがそれが全部自分に来るようになった。もちろん、それを受け止めるのが牧師の働きです。しかし、この人のこういう問題を自分はただ黙って受け止めなくてはいけないのか、と思ってしまう。こっちもいろいろ言いたいことがある。でも、こうじゃないかと助言をすることで、かえってその人から反感を抱かれることもある。しかも、そのようなやりとりは誰にも話せない。そこでわたしは気づかされました。牧師とは本当に孤独なんだ。独りでいろんなものを受け止め、背負っていかなくてはならない。それまでは奈津子先生という大きな山に保護されていた。ところがそれがなくなったとたん、そのような本当の牧師の現場に突き出されて、悶々ととする日々を過ごしました。そんな時に、ある牧師さんの説教を聴いたのです。その牧師さんがこういうことをおっしゃっていたんですね。「牧師にとっても必要な大切な一つのことがある。それは、喜んで教会の底辺に生

きること、これだ」。……教会の底辺、一番底です。牧師さんは続けてこう語った。「わたしたちはそこで独りじゃない。教会の底辺には、他でもない、イエスさまがおられる。さらに言えば、イエスさまがわたしたちよりももっと低いところに立って、わたしたちを支えておられる。だからイエスさまよりも低いところに立って教会を支えるということを、わたしたちはする必要はない」。わたしはいろんな悶々とした思いを抱えていましたけれども、その説教を聴いて解き放たれる思いがしました。何も考える必要もない。黙って、自分が立たせていただいている教会の底辺で生きれば、それでいいんだ。あとは全部神さまにお任せすればいいんだ。もちろん、教会の底辺というのは、牧師だけが生きる場所ではありません。教会員もまたそこで生きている。教会とは実際にそうですね、牧師独りが支えているのではないのです。実際に牧師にはそれがよくわかるんです。いろんな人の、陰の、見えない支えや心遣いによって、教会は営まれている。このキャンプだってそうでしょ。このキャンプだって、多くの人が喜んで底辺に立ってくれることによって、運営が成り立っているわけですよ。底辺というのは、なかなか目立たない。見えませんから、ある意味では……。だから本当にそこで孤独を味わうということもあるかもしれない。でも、まさにそこでわたしたちは、いつも大事なことを見出すことができる。このわたしはこうやって底辺に立って生きながら、ああ、神さまのものとされ、神に聖別されたものとして、神さまのお役に立たせていただきながら、誰が認めてくれなくても、神さまがそのことを見てくださる。それがわたしたちを生かす力です。わたしたちを支える力です。今日ここに集まった特に若い皆さんにぜひお話ししたいのは、これからも教会の中で生き続けて欲しいということです。教会の中で生き続けるなら、わたしたちは自分自身の人生の素晴らしさを見失うことはありません。喜んで自分を生きていきます。そして、そうやって教会に生きていくことによって、わたしたちは、自分の家族や、自分の職場や、自分の学校で、ああ、ここでも、わたしは神のものとされながら、神さまのために生きていくことができるんだ、ということ、いくらでも見つけていくことができるのです。

主イエスは心からわたしたちを愛し、わたしたちの聖別された歩みを、今も主なる神に祈って、支えてくださっています。お祈りをします。

215 祈り)

わたしたちがあなたのものとされて、こうして生かされている喜びと光栄を、今、深く受け止めながら、あなたを見上げ、わたしたちも心から願います。わたしたちをきよめてください。あなたのものとして、どうぞ、わたしたちの生涯を、あなたのご自身の御用のためにお用いください。そのようにして、わたしたちがすばらしい人生を、どのような中であっても、今、与えられている、そのことに、心の目を開いて生きていく者とさせてください。主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン